

陰進

週刊

2024年
6月 第4週

発行元
最前線
anarcho.clitorist@gmail.com
担当・記事 仁科 夏瑚
記事 津島 龍三

保存用 紙版
1ヶ月 500円

月毎に郵送いたします。
詳細は上記連絡先まで

「自立」と「協力」のもとに集え
クリトリスはアナーキストである!

カトリヌ・マラー
『抹消された快楽 クリトリスと思考』より



徒党
陰核派

出生主義プロパガンダ楽曲「櫻坂46」

六月九日に櫻坂46が歌う「愛し合いなさい」がリリースされた。歌詞には、「このままじゃ僕らの国は滅びる 去年より出生率が下がるだろう」「大事な人はいるか 一人きり生きてても 非日常を諦めるな」「錯覚でもいい 愛し合いなさい」云々。呆れるほどに「結婚」「善」「出生率低下は望ましくない」という単純な価値規範が喧伝され、「非日常」愛しい、結婚すること」を最高の価値として命令形で訴えかける一曲だ。

家族への欲望に抗する 少子化政策の世論から

六月五日の日経新聞では、「止まらぬ少子化、予算六六兆円超最低」という記事が掲載された。それによれば二〇〇三年に少子化社会対策基本法が制定されて以来、少子化対策関係予算は増加傾向にあるにもかかわらず、昨年度は過去最低の二〇の増額を記録した。また、児童手当や保育所の再整備・増設・児童手当の支給といった育児支援中心の政策に対し、効果を疑問視する声も取り上げられた。

近年、「子どもは要らない」という主義信条や、「生まれてくることは苦痛である」と主張する反出生主義の存在が知られるようになった。しかし、この曲が示すように、出生率が下がり続けている現代でも、異性愛・結婚の規範、そして子どもや家族を設けることへの欲望は決して弱まってはいない。



▲同楽曲PV動画の「僕らの国は滅びる」から続く歌詞

この記事の後半には、日経新聞が読者約五千人に行った「妊娠・結婚・子育ての壁になること」に関するアンケート結果が掲載されている。複数回答だが「教育費や住宅費などの経済的な負担」と「仕事との両立の難しさ」が首位を飾り、「子どもは欲しいがそれが実現する社会・経済環境ではない」という葛藤が示唆された。またこの記事には六月九日付で『「子はぜいたく品」「仕事と両立は無理ゲー」読者の声』という関連記事が付けられている。そこには調査対象者の二〇％の四〇代の未婚者・既婚者・子供のいる親が回答した少子化問題及び対策の是非に関して、子育てへの諦め、子育てへの無関心を旨とする回答が掲載されている。

市民社会の論理によって「家族」は解体されたのか?

この記事を読んだ直後に私が目を通したのは、今村仁司の「市民社会化する家族」(一九九三年『現代思想の系譜学』ちくま学芸文庫)である。今村は、近代とは、個人の自由を中核とした「市民社会」の論理が、家族と国家の領域に優位し、浸透した歴史だと述べる。自由な意思決定者である市民の論理が支配する近現代は、大家族から核家族へ、果ては家族そのものの消失と「アトム化」が進行するといわけだ。そして今村は、子どもも老人も「市民」として並列化されることの暴力性を指摘しながら、「市民社会のリズムとは異なるリズムをもつ生活世界への希望がひそかに生れつつあるのも確か」(三二七頁)だと述べてこの節を締めくくっている。

拳に怒りを込めて

漫画: 仁科夏瑚



あまああああ 痛い 非

さて、本稿前半で紹介した少子化問題・対策に関する意識調査で欲望されている、「子ども」を設けた先の「家族」「家庭」とはどのような構成なのだろうか。もしそれが

警察介入 都知事選ポスターと東大 学費値上げ反対運動

▼学費値上げ反対運動の様子



興味深いのは、この二件で警察が投入されたのが、いずれも体制支配の根拠となっている領域、すなわち選挙の自由と、大学自治だということだ。警察による介入は、その根拠を脅かすことにも繋がりがかねないだろう。社会は揺らぎつつある。(文: 仁科夏瑚)

後者では、同じく六月二日の二時半頃に、安田講堂前の学生の集団に対して警察が投入された。学費値上げ反対緊急アクションという団体がテントを設営し、夜通し抗議を行っていた最中だった。これまでも明大の立て看同好会や、日大のフリーシーシャイイベント、大阪芸大のビラ貼りなど、大学に警察が呼ばれる事案はあった。今回話題になったのは、東大ゆえだろう。当局は学生による警備員の負傷が根拠だと主張しているが、学生側はそれを承知していない。



▲当該ポスターと桜井 MIU 氏

が核家族(パパママボク!)のような既成の家族概念を意図しているのであれば、そこからは今村の示唆したようなパラダイム・シフトの気配は感じられない。私は依然として子ども・家族への強い執着と欲望を感じている。それを振り切り、子どもも生まれず、家族も解体され尽くされ、緩やかに進行する破壊に、有限の生を刻む人類の歴史があってもいいのではないか。そんなアルカディアの想像と志向を糸口に、ありうべき世界を構想し始めてもいいと、私は思う。(文: 津島龍三)

